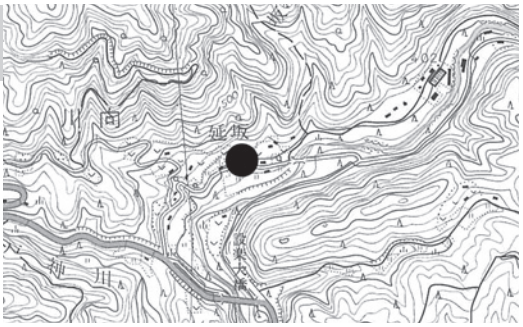
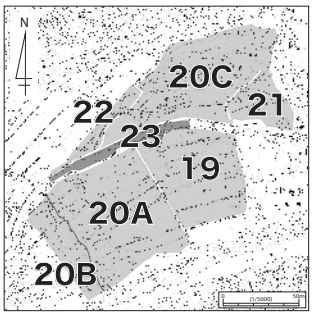
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所　在　地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度34分05秒）
調査理由　設楽ダム
調査期間　令和5年5月～7月
調査面積　580㎡
担　当　者　鬼頭剛・川添和暁・荒木徳人

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として令和5年5月から令和5年7月にかけて実施した。



調査区位置図

立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んでおり、緩斜面は度重なる扇状地堆積(土石流堆積)の累積によって形成されている。今年度の調査区は県道432号小松田口線道路直下に位置し、調査面積は580㎡で設定された。調査区の調査前の標高は、396～403mを測る。

調査の概要　調査区の東端は20C区および19区でも確認されている谷地形がのびており、調査区の西側に向かうにつれて、地形の高まりが確認された。本調査区では谷地形より西側にかけて中世から近世の遺構が展開しており、主な遺構として土坑墓２基、建物跡、道状遺構、柵列跡4条が挙げられる。

土坑墓　6006SZは楕円形の土坑墓であり、埋土は土坑墓の底面から粘土質の土壌の上に径10cm程度の礫が埋め込まれている状態であった。6006SZの底面付近から寛永通宝、煙管、銅鏡、毛抜き等の鉄製品、繊維製品、灰釉摺絵鬢盥が出土した。銅鏡の裏面には流水紋と江戸時代の鏡師である藤原の銘が施されていた。灰釉摺絵鬢盥は扁平な筒状の形状をし、表面には摺絵で紋様が施されており、瀬戸美濃窯産のものであると考えられる。

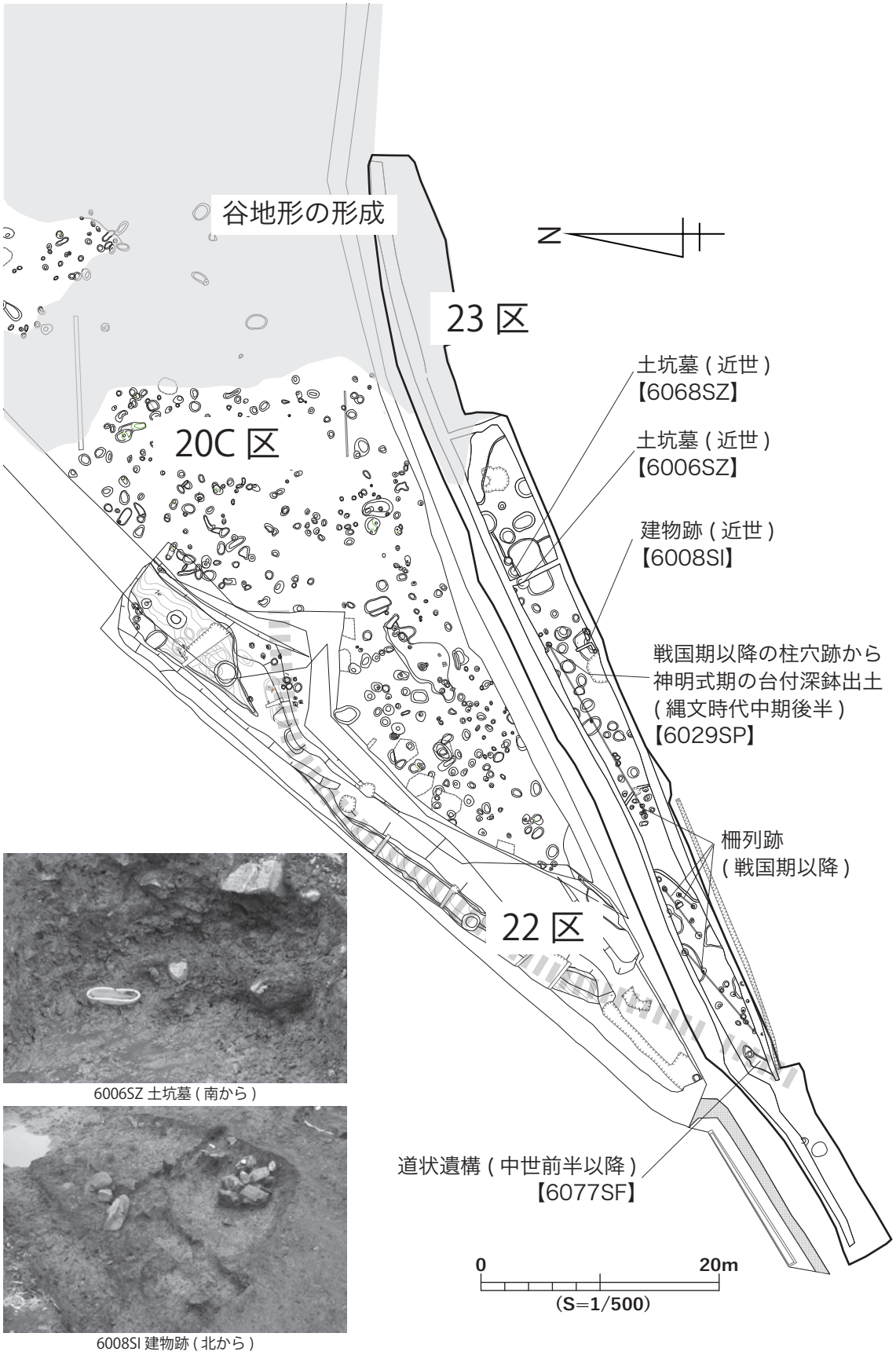
6006SZ に隣接した場所に位置する6068SZは近世以降の整地や耕作により、土坑墓の一部が滅失していたが、残存している形状から楕円形であると考えられる。この土坑墓の底部からは寛永通宝、鉄釉丸碗が出土した。鉄釉丸椀はほとんど完品の状態で出土しており、高台部以外にはツケガケが施されている。

道状遺構　調査区の西側では中世前半以降の道状遺構に伴う整地層6077SFが帯状に残存しており、22年度調査区の道状遺構と繋がるように展開していた。

建物跡　6008SI内では建物跡と思われる落ち込みが重複した形で確認された。遺物は近世の擂鉢片や鍋片、被熱を受けた金床石が出土しており、これらの遺構は近世の段階で鍛治関連の作業場として使われていたものと思われ、建物も重複した建て替えが行われていたと考えられる。

神明式期台付深鉢　また、6029SPから縄文時代中期後半の神明式期の台付深鉢の台部分が出土した。遺構の年代は戦国期以降のものであるが、20年度調査C区でも縄文時代中期後半の活動痕跡があることから紛れ込んだものであると考えられる。

(荒木徳人)



6006SZ 土坑墓 (南から)

6008SI 建物跡 (北から)

調査区全体図 (S=1/500)